2020 年 11 月 30 日
青年部通信 第 4 号
発行 福島県弓道連盟青年部
問合先 梁川支部 佐藤和也
E-mail:kotaro0045@gol.com

【今季号の主な内容】

■加藤出先生独占インタビュー！
誰も知らない先生の素顔とは？
■緊急レポート！枕の素材は明治時代？！徹底調査で時代を読み解く

特大号

福島県弓道連盟会長加藤出先生独占インタビュー「福島県は誰もが県連の弟子」守り続けたい思い

青年部の皆さんは、私たちが所属している福島県弓道連盟の会長、加藤出先生のことをどれだけ知っていますか？大会や練習会でしかお会いする機会がない方も多いかもしれませんが、困った時はそっと助けてくれる「少し遠くて、ちょっと近い存在」そんな風に感じる青年部の方は多いのではないでしょうか。

今回は、青年部を代表して加藤出先生に独占インタビューをしてきました。道場では見ることができない加藤先生の一面を垣間見ることができ、ますます加藤先生のファンになりました！そして、福島県の弓道界の素晴らしさを改めて感じました。そんな加藤出先生のあんなことやこんなことを沢山取材してきましたので、是非最後までお楽しみください！特大号です！！

加藤 出 先生

- 範士八段
- 福島県弓道連盟会長（川俣支部）
- 昭和 24 年 7 月 4 日生まれ、福島県川俣町出身。福島県立福島商業高校で弓道に出会う。
- 称号授与 平成 20 年 5 月 1 日
- 段位承認 平成 17 年 11 月 4 日
- 第 32 回（1982 年）全日本弓道選手権大会当時最年少で優勝。

―今日はお時間を頂きましてありがとうございます。

青年部の年代になると、加藤先生の輝かしい成績を少ししか知らない方も多いので、先生の話をお聞きして記事にすることで皆さんに知って頂けたらと思い、伺いました。今日はよろしくお願いします。

「**私の弓歴は、輝かしいように見えるけど、全然輝かしくないんだよ。**その何倍もひどい目に遭ってるんだよ。何十倍かな…。」

天皇杯編

―一番思い出に残っていること、気持ちに残っている体験はなんですか？

「やっぱり天皇杯ですね。一番はね。それを取ったのは 32 歳の時ですよ。同級生が結構活躍してるんですよ。昭和 24 年生まれの人が。東北の方から言うと川村光良さん（青森県）、名だたる名手だね、彼は射道優秀賞を何回も取っている。このあいだ青年部でおいでになった土佐正明さん（千葉県）、彼は天皇杯を複数回取っているはず。張替謙一さん（茨城県）もだし、深町芳洋さん（山口県）も、結構多いんですよ。その人達が育ってきた時期だったんですね。

私が**選手権に最初に出たのは 27 歳の時**、初めて行けと言われて行ったんですけど、それはもう全然…。中りは強い方だったから中りはそこそこだったけど、でも点数が上がらないんですよね、やっぱりね。2 回目もダメで、30 歳だったかな。4 回目が 32 歳の時。その時、初めて予選通ったんですよ。その頃は、予選が終わった後で、20 名集められて、決勝の抽選をくじ引きでするんですよ。一手 5 回 10 射やるんですけど、私は 2 本目に抜いたのね。その時点でこれはダメだとなったんだけど、その後気が楽になったせいもあって、詰めて 9 中で終わったんですよ。

5 人ずつ 4 立だから、その後の立に中ってた人たちがいたんだけど、バタバタと落ちちゃってね、結局は 9 中が2人しかいなかったんですよ。皆中はゼロで、9 中が私と**新潟県の鈴木博先生**。この先生は前に天皇杯を 1 回取ってる先生なんですよ。だいぶ歳は違ってました。

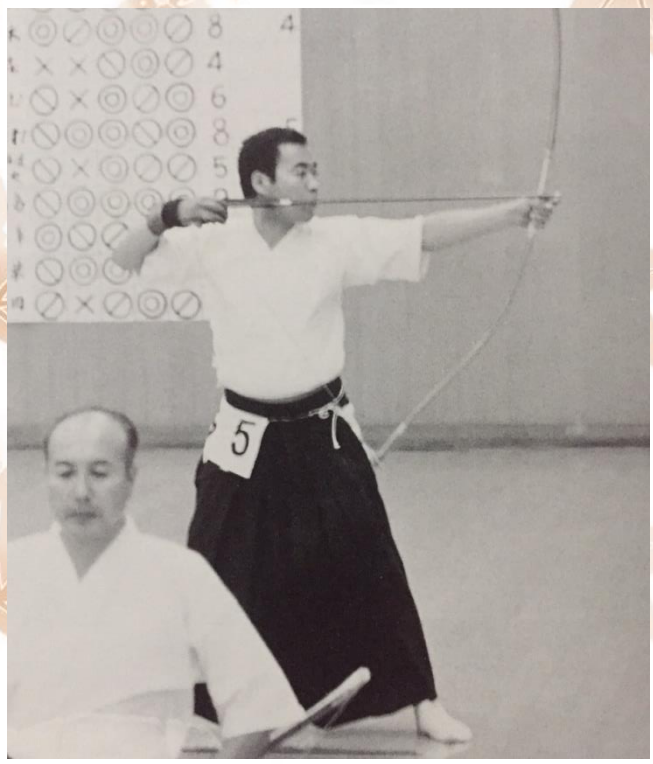
2人の射詰めが始まって、鈴木先生が前立ちで、私は後ろだったの。何年か前、村川平治先生が優勝した時に、川村さんと村川先生の有名な 24 射の射詰め戦ていうのがあったんで、当然ながら少なくとも 5、6 本は続くのかなと思っていたところね、最初の 1 本目で鈴木先生が抜いちゃったの。その時、**私にグッと重圧が来て**、これが中れば優勝だし、っていうのがあってね。その時は、私も長い弓道人生ではそんなにはないんだけども、なんだか恥っていうのがあって、全日本の決勝へ 9 中で通ったっていうのも恥だと思ってたんだよね、皆中ではなかったということで。そんで全日本の決勝の射詰めで、しかも 1 本目で、2人で抜くなんてみっともないじゃないですか……。その時は自分がどうのとかではなくて、**弓道の名誉というか大会の名誉のために、絶対に中てると思ったのよ。この時だけですね、50 万射近く引いてきたけど、その時だけです、絶対中てると思ったのは。**

今でも覚えていますよ、9 月 25 日、明治神宮の至誠館ですよ。**離した瞬間にね、中ったっていうのが分かったの。**中てようと思って引いたんだからそうなんだけど、その時に矢が到達するまでの時間があるよね、あれが映画でいうスローモーションになるのがあるよね、あんな感じで見えるんですよ。矢がこう、的に向かって飛んでいくのがゆっくりなのね、**ふわっとスローモーションのように。それでその時に、場内は静まり返ってるんだけど、すごい虫の声が聞こえたんだよね。あぁ虫の声が聞こえた…って思った時にポンと音がして、そしたら今度はワーッと拍手が聞こえたんだよね。**俗にいう弓の神様が微笑んでくれたというのもあってね。私なんかは運の良い方なんだけど。っていうのも、次の次の年だね、10 射皆中が私を含め 5 人いたんですよ。優勝した時は 9 中がたった2人。5 位まで表彰だから、もう入賞は決まってたわけ。それだけ私が優勝した時にはレベルも低かったと言ったら失礼だけども、運もあったということでしょうね」

―この時はどんな気持ちだったのですか？

「浮ついてたの。5 位に入れたっていうことで喜んじゃって。今は亡くなった、愛知の本多政和先生っていう天皇杯 5 回取った先生がその 5 名の内の 1 名だったんですよ。決勝が終わって射詰め戦になる、この間隔っていうのは魔の時間なんだ。ここでどう過ごすかで、結果にうんと大きな影響があるのね。1 回目は、初めてだったし、時間も余裕も無かったので絶対中てるぞというのは自分のためではなくて弓道の名誉のためにと思って出た決勝戦だったものだから、心構えがまるで違うんですよ。2 回目は、一昨年は 9 中が2人しかいなくて今年は皆中が 5 人もいるんだなんて減らず口を叩いてたのね。それを見咎めて、本多先生には『加藤さんこれはだめだ』って言われた。その時でなく後でね。そしたらやっぱり射詰め戦になったら 1 本目で抜いちゃって、遠近になっても一番外側で 5 位だったですね。やっぱり気持ちというのはすごくあります。

道場の中では道着袴でしょう。表彰されて、私服に着替えて、帰る時に東京都連のご婦人たちがいるわけですよ、役員や観客でね。そうすると『あら若いのね』なんて撫で繰り回すのよ。32 歳くらいだったから。一番嬉しかったのは、天皇杯取れたっていうのよりも『あなたは淡々と引いてました』ってご婦人たちに言われたことだね。私服で 32 だから若く見えて、『そんなに若いと思わなかった』って。**淡々とではないんだ、心の中はもう荒波だし、中てようと思ってギンギラギンになってるわけだから。淡々と見えたっていうのは、一番の誉め言葉だと思ってるんだ、今でも」**



【1981 年（昭和 56）発行「月間弓道」第 10 号より】
第 32 回全日本弓道選手権大会で優勝した加藤出先生
資料提供：公益財団法人全日本弓道連盟

【1981 年（昭和 56）発行「月間弓道」第 10 号より】
第 32 回全日本弓道選手権大会入賞者
左から三番目が加藤出先生
資料提供：公益財団法人全日本弓道連盟

―審査員の先生や一緒に出場した先生方からは何か言われましたか？

「審査員が７人いるわけだけど、弓道教本４巻に出てくる先生方だ。福原（郁郎）先生、窪田（真太郎）先生、鈴木弘之先生、村上（久）先生もいたかな…一緒に戦った先生は、山下三ヶ十先生（前副会長・鹿児島県）、あとは誰だったかな…相当な先生ですよ。福島県で一緒に行ったのは向井先生だったですよ。審査員の先生からは、評価は何もないです。(私が天皇杯を取った)次の年に岡崎廣志先生（山形県）が取ってるんですよ。岡崎先生が優勝を取った時も全国区ではなかったですよ、その当時ね。私ももちろんそうだけど。今までの歴史を見ると、天皇杯を取った後一人黙々と練習してて潰れる先生が結構いるのね、全国には。天狗ではないけども、急に偉くなっちゃって、そういう人もいるから、用心しろという戒めがあるのね。その時に弓道誌の記事の中で、岡崎先生は天皇杯を取ったけれども、**『ライバルというか、良き競争相手もいるから大丈夫だろう』というのがあったの。その競争相手っていうのが、『川村、加藤』という内容だった。**

青年部の成り立ちにちょっと触れるけど、最初は福島県に青年部は無くて、宮城県にはあったんですよ。宮城県と福島県の青年部対抗戦をやりましょうと申し込まれたの。ところがうちの方には青年部の組織が無かったから、その時に池添（祥史）先生を中心に青年部を作ろうという話になって青年部が出来たんですよ。

それと、今でいう三四五段講習会、あれはずっと無くて、復活したんですね。その頃は東北地区の講習会の中に錬士を目指す人たちの講習会があったの。これは原則的に平 4、5 段が参加できるものだったんですよ。他県の選手と一緒に寝泊まりして練習するというのはそれが唯一だった。その頃一緒になった人たちというのはずっと**今も弓友というかライバルというか、そういう形で来ているんですよ。それが私の一つの大きな財産**だったのかなと思いますね。青森は川村先生をはじめすごい先生方がいて、全然違うんですよ、我々の弓と。寒いでしょ、あっちは。こっちだって東北だから寒いには違いないんだけど、寒いと道場なんて行きたくないんですよ。その時に後押しされたのが、**「今頃川村さんは寒い八戸で引いてるんだろうな」と思ってね、それが励みになって練習できた。**練習なんて嫌で嫌でしようがなかった。練習が楽しくなったのは歳取ってからの話だね。ぶざまな弓を引きたくないから、それでもってしようがなくて練習してたくらいで。ノルマになっちゃってるのね、練習が。ずーっと長いこと、晩年まで、練習というのは嫌だった、辛かったね（笑）」

弓道との出会い編

本当に入部したかったのは……

「高校１年から弓を始めたの、福島商業高校で。私らが入った年から、完全男子校になっちゃったの。西女子高っていうのが出来て、それで商業高校は女子が西女で、男子が福商になったんですよ。当時、福商に道場は無かったですね。

弓道との出会いは、恥ずかしいというか…足が速かったんですよ、こう見えても（笑）。短距離なんだけども、陸上部があったので入ろうと思っていたんですよ。部活紹介なんかもあって、私は１年２組だったんだけど、放課後隣りの１組の教室が騒がしかったんだよね。魔が差したっていうか、ちょっとそこを覗いたの。そしたら腕をつかまれて、『はい！』なんて言われて中に引っ張り込まれて。

【1981 年（昭和 56）発行「月間弓道」第 10 号より】
第 32 回全日本弓道選手権大会で鈴木博先生と握手を交わす加藤出先生　資料提供：公益財団法人全日本弓道連盟

そこが、弓道部の入部希望者の集まる場所だったんですよ」

加藤出先生の　あんなことこんなこと（壱の巻）

○陸上が得意だった加藤先生。学生時代の 50m の記録は５秒７！俊足です！
○校内の陸上大会で 200mを走る姿を見て、陸上で有名な指導者が、弓道部の顧問に「立派な選手にするからコッチに…」って引き抜きの話を持ち掛けたらしい。

（その裏話を、八段をとって「先生」と呼ばれるようになってから、こそっと話してくれた顧問の先生…粋ですね）

本気のスイッチ

「学校に弓道場は無いので、市の弓道場に間借りして練習してたんですよ。今の児童公園の機関車が置いてある場所が弓道場だったんです。その時はどうせ退部すればいいんだと思って、まあ見るだけ見てみるかと思ってね。夏休みに入った日に初めて的に立ったんですね。それまでは巻藁をやったりしてましたね。それでその日、2、3 回目に中ったんですよ。中りの魅力っていうのはすごいよね、また中てたいって思って、それで本気モードになってきたんだな。

でも巻藁で最初に離してみろって言われた矢が、耳をバチーンと打って、耳がキーンとなるし、その挙句、先輩が言った言葉が「見ろ！ぶったべ！」って（笑）。あれは痛かった…。

それまで弓道というワードは……

「まーったく無い（笑）。強引に引っ張り込まれなかったら、弓をやってないかもわかんないですね。高校生の時は、全国大会の経験は無いんですよ。一番上の大会は、国体の予選で（3 人）12 射皆中をして、（渡邉）富次先生の勿来高校とやって負けた大会かな。県総体では技能優秀をもらって、学校の卒業式で表彰されました。それが唯一くらいかな。すごく中る方でもなかったんだよね。その頃の的中は…7 割 5 分は中ってたと思うけどね、4 射 3 中が目安なんですよ。羽分けになると卑屈になるという感じだね（笑）」

審査にまつわるエトセトラ編

どちらのタイプ？

「皆さんも長い弓道人生そうなってくると思うんだけど、一番大きな目標は八段なんですよ。『審査は、受けるからには取るつもりで受けなさい』と人にも言うんです。川村先生は、『審査は取るつもりで受けてはいけない』と言うんですよ。天才川村と凡才加藤、よその地区に行って、川村さんと講師になったりすると困るんだよ（笑）。あの人も頑固なところがあるし、私も…。

取るつもりになって一生懸命練習して、落とされて初めて勉強になるんだから、絶対取るつもりで受けろって言うタイプなのね。根が吝嗇（りんしょく）というか、ケチなのかもしれない、受審料がもったいないっていうのもあるね。八段になると受審料が 1 万円でしょう、その上、電車賃をかけて宿泊費もかけるんだから。40 歳の時に七段を取ってから 55 歳まで 15 年、1 回も受けないで過ごしましたね。

私らの頃は早い人もいたの、白河の山崎（一史）先生は 32、33 歳で七段を取ったんだね。私の場合は錬士を取ったのは 25、26 歳。32 歳の時に教士を取って、選手権を取ったんですよ」

きっかけの言葉

「埼玉県の松沢岳（たけし）先生が郡山審査で審査員だった時、迎えに行った車の中で、『加藤君は八段受けてるのかね』って言うんですよ。取るために受けないと勉強にならないと思ってるし、八段はライフワークだと思ってるので、生きてるうちに取れればいいな、そのくらいの感じだったんです。取れる自信も無いし、もともと弓は上手な方ではないから、『受けていません』と言ったのね。そしたら、『審査は挨拶なんだから来なさい』と言うんですよ。でも人には得手不得手というのがあって、『挨拶と言っても東北なまり丸出しでうまく口上も述べられない、挨拶したって逆効果じゃないですか』って生意気を言ったんだね（笑）。それでも『いや、そうではないんだ、挨拶なんだから来てみなさい』と言うんですよ。それで、その時から 2 年目の仙台の審査を受けたんです」

【加藤先生に出前を取っていただいた川俣シャモの親子丼】

八段までの道のり

「そこで気持ちの良い、松沢先生に言わせると『上手な挨拶』が出来たんです。ポンポンと中って、自分でもまぁまぁかなと思って、そしたら該当無しなんですよね。でもそれは望むところなんだ。日頃から審査に向けて練習して、これなら取れるという射を出して、それでガンとへこまされて、育つものだと思ってるから。

今は次々と受ける人も多いけど、その頃はせいぜい年に 1、2 回だね。それで次の年の同じ仙台まで、悪いところを直して一生懸命練習しました。そこでポンポンと中って、どうかなと思っていたら、たまたま一次合格となって。その後の二次も、2 本ポンポンと中てて、でも駄目なんですよやっぱり。

その後の福岡では、甲矢を抜いて、あまりの暑さに…福岡の道場は、片流れの屋根で 2 階が控室なんだけど、9 月上旬だからとても暑いんですよ。私は審査や大会の時、やたらと人の射を見るのはダメだと教わったから、自分の気持ちを落ち着かせるためにじっと孤独に控室で耐えるタイプなんですね。そしたら、二次は午後の予定だったんだけども、参加者が欠席とかで、急遽午前中にやるということで招集がかかったんですよ。そしたらもう汗がダクダクで、肌脱ぎをしたらビリビリ！と襦袢が裂けちゃうくらい暑くてね（笑）。それで甲矢は失敗して、乙矢は詰めたんだけど、落ちて。

その後、11 月の明治神宮で二次を通ったんですけど、八段の審査は全部で 4 回受けて、合計 10 射引いたんですね。そのうちの 1 本だけなんですよ、抜けたのは」

（注：八段審査は、第二次審査で所定の得票がなかった者は、事後 1 年間に限り第一次審査を経ず、第二次審査を受審することができる）

加藤出先生の あんなことこんなこと（弐の巻）

○名前の由来は、広辞苑の作者：新村出氏にあやかったらしい！
○今では想像できないけど、高校ではストーブに椅子を壊してくべたり、部活で一番中らなかった仲間にコロッケを買いに行かせたりしていたらしい！（もちろんお金を託してね！）

自分を知るということ

「中りを自慢してるわけではなく、その当時の練習の度合いから言って、そんなにバンバン中ってる方ではないの。だけども妙にね、審査で緊張すると、気合が入るタイプなんだなと気が付いたんですね。その方が良い弓を引けるのかな、と思ったりもして。自信があったというわけではなんだけど、それが心の拠り所になったのね。

ハレとケってよく言うんですけど、ケは普段の場という意味で、いざという時に中てられるというのはその人の財産だよね」

お守りアイテム

「それと、黄色いタオルを持っててさ、弓手の方に（笑）。八段審査を受け始めてからだね。「幸せの黄色いハンカチ」というわけではないんだけど、黄色というのは特別な何かがあるのかもしれないね。私にとってはラッキーカラーだね」

一人稽古

「八段を受けるには、自分で自分の射を評価しなくてはならないし、私の場合はほとんど皆と引けない状態だったんだよね。事務局をやっていて忙しいのもあったし、仕事も持ってたし、自分の所で引けるもんだから、自分でパパっと引いて、俗にいう一人稽古なんですよ。一人稽古は良くない、最低 3 人でやりなさいとよく言うでしょ、でもそれはやれる人とやれない人がいますよ。それで、一人稽古で自分の射を評価する時に拠り所になるというか、何を目安にしてるかというと、当時は自分の射を見る機会っていうのは無いから、自分の感じで良し悪しを判断するしかないんですよね」

三つの要素

「八段を受けて良い射か、判断する時に 3 つの要素を挙げていて、1 つは切れの良い離れ。方向性、ストロークもですね。それから収まりの良い残身。収まりが良ければ射は良好。それから弦音ですよ。この 3 つをもって、良くなったとか悪くなったとかを判断してたのね」

化ける・普段の練習・スランプ編

「世の中を見ると、急に上手くなったなっていう人がいるでしょ、一夜にして目が覚めたみたいに上手になる、っていうような。我々は「化ける」って言うんですよ。だけどよくよく考えて一夜にして化けるなんてことはあり得ないと思ってるのね。自分の経験も含めて。
漫然としたノルマ型の練習と、自分の確固たる意識をもって、こういう弓を引きたいという、理念をもった練習と二つあるんですよ。我々はだいたいはノルマ型なの。射型とか、運行とか、冴えとか、離れの鋭さとかで中ててる上手な人は世の中にたくさんいるけど、私の場合は勘で中ててる部分があって、勘が狂うと中らなくなるという恐怖感があるの。その勘を狂わせないためには毎日練習するしかないんですよ。道場にぼやっと行ってられない環境もあったし、運良く長い土地があったから…庭で野立ちで引いてたの。震災前の 20 年くらい。野立ちっていうのは面白いんだよ。（松本）千代治先生に『屋根の無い道場で梅雨に困るべした』と言われたんですよ。でも朝昼晩とちょっと弓が引ける時間があるとするよね。そうすると、朝昼晩雨が降るということはほとんどないんですよ。1 年を通しても本当に何回か。練習には事欠かないし、あと面白いのは蜂が巣立ちの頃、敏感になって人に向かってくることがあるんですよね。蜂は追ったりしなければ害はないんだけど、弦音がね、カンッ!と出た時にブンッ!と来るんですよ。これは面白いです。たぶんね周波数が勘に触るんだと思うんですよ、攻撃モードになるんだね。何を言いたいかというと、**弓の修行というか稽古はやっぱりコツコツなんですよ。一夜にして化けると言うけど、それは一夜にして化けるんではないんですよ。**自分が理想とする射があって、長い練習でこう引きたいこう引きたいと練習してると、ポンと出る時があるんですよ。あ…今のは良かったな、追い求めてた射なのかなと思うんだけど、どう引いたか覚えてないんですよ。それはなぜかっていうと、意識してこういう弓を引こうって頭で考えてる時は絶対引けないんですよ、それがこうやろうっていうのを絶えず思ってててね、ふっと忘れる時があるんですよ、その時にポンと出るんだね。
　その頻度が最初は半年に 1 回くらい来るんですね。そしてまた半年くらいたつと、意識しなくなるんでしょうね、そしてまたポンと出る。これが**だんだん縮まってくるの**。毎回は出せるってことはもちろんできないんだけど、緊張したり審査の時だったり、何かの時にそれが出せるようになれば一番いいんだけど。そのコツコツやってる練習の所を見ないで、久しぶりに会った人がポッと引くと、あ～あの人化けたって言うんだね、昨日まで一生懸命やってもダメだった期間がこれだけあるのに、たまたまここを見た人が、ここから上手くなったように思っちゃうんだね」

「前の前の会長の石川武夫先生（東京）が言ってたね、弓はコツコツですよ、と。皆さんも指導する立場にこれからなっていくんだけど、口でもって教えるっていうのはほとんど伝わらない。講習会では皆さん必ず上手になる、だけどそれが長続きしたことはないでしょう？（笑）
　講習会の最後の挨拶で必ず言うのは、『確かに今日、朝と夕ではまるで射が違う、講習会の効果が出たといえば我々としては嬉しいけど、2、3 日も引けば必ず自分の弓に戻ってしまいます。でも元に戻ったから、俺には合わないんだ、なんて 2、3 日で結論付けないで、とにかく 2000 射引きなさい」ってことなんです。それが 1 年になる人もいれば半年になる人もいれば3ヶ月になる人もいる、それは練習の量によってまちまちだけど、自分の引きたい射を頭に描いてコツコツやるっていうことが一番の練習かな。
　今酷い世の中ですよ、コロナで春先から大会も出来ないし、人と会うなって言うし、ソーシャルディスタンスとかマスク掛けてお話ししなきゃならないから。でも、そういう時こそ、基本に立ち返って、もう一回自分の弓を練るっていうのはすごく良いチャンスだと思うね。前向きに捉えれば。大坂なおみも藤井聡太も見違えるように強くなったでしょう？コロナをうまく使った人とそうでない人と…楽しみですよ。化けた人が何人出るか…」

―スランプはありましたか？

「ありますよ。バイオリズムではないけど、波がある。ただ長年やってるとあと何週間後にベストが来るっていうのがわかるんですよ。その時がちょうど選手権の予選とかならいいんだけどさ、このままだとまずいぞっていうのもわかる。だからそれを波半分ずらすっていうのもある。ルーティンもあって、例えば爪を切るっていうのもそうだよ。審査の何日前に爪を切るっていうのを決めてるよ。あとは握り皮の交換、弦は何本かけて本番に行くかは決めてたね、逆算して作って。

審査の時は、控えで小さく肩の体操をする。水泳のメドレーリレーの順番、背泳ぎ、平泳ぎ、バタフライ、自由形。その 4 つの動きをやる。巻藁はもちろんできないし、人に迷惑をかけないで、体がほぐれるね」

弓と仕事と家族編

範士十段の言葉に思うこと

「個人事業っていうのは融通が利くんです、そういう意味では恵まれてるね。福島市の（NCV アリーナ）弓道場に村上久先生（範士十段）の書があるんだけど、その中に『忙中一射の弓徳を積むべし』という言葉があるのね。『忙しい中で時間を見つけて引いた一射こそ、弓の修行の密なるものだ』と言ってるのかなと思うんです。朝から晩まで、2 時間とか、何十射っていう必要はないの。一手でもいい、1 本でもいい、忙しい時に暇を見つけて、引ける場所に行って、精魂込めて 1 本引くということこそが、弓の肥やしになると思ってるんですよ」

休んだ期間は 2 週間！

「一番長い休みが 2 週間くらいかな。胆石があって、胆のうをとったことがあるんですよ。夏に入院して、飲まず食わずで 7 キロくらい痩せちゃって。もちろん、退院してすぐ弓を引いたよ。手術は暇になる冬にしたから、その時は外科治療はしなかったんですよ。
夏に広島で講習会があって、帰りの新幹線で鰻弁当を買って食べたんだよ。その後でお腹がちょっと変だなと思って。次の日に食べた蒸し野菜が美味しくてたらふく食べたら、その時にやられちゃった（笑）。もともと胆石があって下りてきたんだね。

練習が楽しくなったのは最近だね。自分の射の良し悪しがわかるようになってきたのかな、ここをこうすればこうなる、とか。工夫しかないんだよね、一人稽古だから」

加藤出先生の あんなことこんなこと（参の巻）

○簡単と言われた腹腔鏡手術は、なんと約 6 時間かかったんですって！奥様もだいぶ心配したみたい。でも両手にミトンを付けて拘束されて、「普段真面目な人は麻酔で変わる」っていうナースの言葉に、「セクハラしたのかと思った」っていうエピソードも！

子どもは正直

「毎日見てると子どもでも違いはわかってくるね。今は庭の安土の向こうにグループホームができて、おじいちゃんおばあちゃんが窓から見るから引きにくくなったけど（笑）。息子が子どもの頃、庭先で引いてると見てるんだよ。『お父さんの真似してみろ』って言うと真似るよね。そうすると『えいポン』て言うんだよ。今、孫が来て、自分の射を見せるでしょ、『じいちゃんどうやって引くんだ』って聞くと、『えいっ』って言うんだ、ポンが無いんだよね、情けないなと思って（笑）。でも孫は『えいっ』はいいんだよ、息子の『えーい』とは違う。切れは良くなってるんだろうな、ところがポンが無いんだ（笑）。今のどうだったって聞くとこうこうこうだったって体で表現するよ」
（注：「ポン」は的に中った時の音）

とんでもないこと

「息子は弓道をやらなかったね、弓を買ったりしたけど。それはそうだ、運動会、学芸会、子供会の行事にもいなかったから、弓なんてとんでもないと思ってる。カレンダーに丸印を付けてるんだけど、孫も家に来ると、「じいちゃんはまた行くの」って鉛筆で丸印をごちゃごちゃと消したりする。丸印が無ければ行かないと思うんだろうね。今はコロナで外出しないから、妻も機嫌がいいね（笑）」

加藤出先生の奥様データ！

☆福島市内のお生まれ
☆弓道経験者！高校生の時に友達と入部したものの、性に合わないと感じた頃、友達も辞めてしまい 1 年で退部
☆出先生は奥様のお兄様と同級生で、よく友人と奥様の家に遊びに行っていた
☆自宅が庭坂の自動車学校の近くで、高校に行くと言っては教習所に通う出先生他やんちゃな学生のたまり場になっていた
☆30 歳の時に結婚。奥様のお母さまがちらし寿司と漬物が上手だったけど、未だに加藤家の食卓には出てこないとのこと（笑）

師匠・他県との交流編

―師匠はいますか？

「師匠は宮城の菊地慶孝先生、お医者さんだね。初めて行ったのは25、26の頃かな、当時、幕田先生っていう会長がいて、私ら行くんだけど行ってみないかいと言われて、それで付いて行ったんだけど、今にして思うとね、要はアッシー君なんですよ。（笑）足が無いので、私を誘って、足を確保しようっていう魂胆が見え見えなんですよ。でも行って習ってくるよね。頻度としては 4 か月から半年に 1 回とかなんですよ、しかも有名な先生だから土日は全国歩いてるでしょ、平日は医者だから山ほど患者さんがいるわけですよ。行くと、患者さんをほっぽって、我々が行くからって道場を掃除してるんですよ。多くても一手 4 回くらいかな、見てもらえるのは。

福島商業の時に習ったのは、野地福恵先生という男性の先生で、教わったことが 3 つあって、私の基礎になってるんだけど、紐下を細くしろって言うんだよ。要するに勝手の力を抜いて、弦に引かせろっていう意味なんですよ。調子が良いときは、弽が手に当たってこれ(弽が当たって擦れる痕)が出来るの。もう 1 つは矢の延長線上が脈所、実際は来ないんだけど、それくらい下弦を引きなさいということ。もう 1 つは弓手の方で、3 時に付けなさい、と教わったんですよ。体を入れながら、的心にもってくるんだよ、と。素直にやってたんだけど、そのうちに弓が強くなってくると、3 時に付けるとやっぱり負けるんだよね。前上に抜いちゃうんですよ。それで後ろに振る癖がついたんだ。それで、菊地先生の所に行くと、「クレー射撃の加藤」って言われるんだ。これがなかなか直らなくてさ。
よくね、偉い先生に習えていいなとか、思うでしょ。でもそれはそれなんだよ。毎日見てもらえるならともかく、**偉い先生は全く教えない、絶対誉めない。**私も教士を受けた時に、秋田の審査で受かったんだけど、菊地先生はその時も何も言わない。菊地先生が亡くなってから川村さんが教えてくれたのは、**「あの時の加藤の射は拝むような射だった」**って言ってたよって。生きているうちは全然誉められたことはない。

だから唯一、その先生かな。べったりでもない。言われたら、まずはやってみるってことだね自分でね。それが一番いい修行になると思いますよ。

自分もよその県の弓道会に所属した時期や、菊地先生に教わったこともあったから、会員がよそに行って習って来るっていうのは、推奨ではないけども、行け行けという方なんですよ。若い人が気を遣って『〇〇県の△△先生に習いたいんですが良いでしょうか』っていう話を受けると、その県の先生に事前に連絡するんですよ、そうすると遠慮して、『地元に先生がいるのに、お断りします』っていう先生もいるんだけど、『福島県の財産になるんだから、ぜひ面倒見てください』とお願いするんです。やっぱり**自分と骨格が合ってる先生が上手に引いてるところに行くのが一番いい。**

私は教えることはあんまり好きでない、というか、言葉では伝わるはずがないと思ってる。立場上講習会では一生懸命伝えるけど、確かにその時は上手くなるんですよ。朝と夕ではまるで違うくらいの弓になって、講師は満足するんだけど、腹の中では『三日も過ぎると元の射になちゃうぞ』って思ってるけどそうは言えないからさ（笑）。その時は直ったと思って、よし、今度は覚えたって帰ってくるんだけど、やっぱり一人稽古になると、どうしても戻っちゃうね。よそから見るのと、自分のイメージと違うからね。

県連への思い

我々の時もそうだったんだけど、**教わり方を知らないのね。**この人はこういう弓を引いて、こうなってきたなっていうのは絶えず我々は見てるんです。

なぜかっていうとね、私が教士に受かった時、その頃は、一次合格、二次合格者が面接なんですよ。合格間違いなしっていう人が面接に行くの。その席で、今でも忘れない、八反田角五郎先生に言われたんだ。『君は 32 で若いんだけども、君の県に教えたがってしようがない先生がいるだろう、名前を言ってみたまえ』って言うんですよ。（笑）これはひっかけ問題だなと思ってさ、顔が思い浮かんだんだけど、うっかりその手に乗ってはいけないと思って、『うちの県にはそのような先生はいません』って言ったんですよ。そしたら『いやいるんだ、私も知ってるんだから、言ってみたまえ』って 3 回くらい押し問答してさ（笑）。結局はいませんって通したんだけど。若いんだし、人に弓を教えるなんてことはとんでもない話なんだから、教えるなって言われたの。**『その代わり、聞かれたら、誠実に、丁寧に、わかりやすく、きちんと説明しなさい』って。**『はい』って言ったのね。

その後、教士になって、実際に審判席にいるよね、次から次と選手が出てくるわけですよ。誰に聞かれるかわからないんだよね。その先生と約束したことは、『聞かれたら、誠実にお答えしなさいよ』という教えなんだから、この人に聞かれるかこの人に聞かれるか…わかんないわけ、その人全部に聞かれるかもしれないんですよね。それをメモをとりながら見てるんですけど、これが大変なのよ。例えば 200 人いれば、8 本引いたら 1600 本引いたと同じくらい疲れちゃうんですよ。1射ごと見てて、この人に聞かれたらここをアドバイス、この人はこう…なんて書いたりするでしょ、見取り稽古でクタクタになっちゃうんだけど、そういう風に、**誰に聞かれても対応するということは、心掛けてやってはいるんです。だけども、今の人たちっていうのはね、聞き方っていうか教わり方を知らないんだよ。**例えば私が審判席を外してトイレに行くよね、廊下で会った人がこう、会釈して、じっと顔を見て。アドバイスを聞きたがってるのはわかりますよ、わかるけども、顔を見て目を見ただけでは教えられないですよね。『私はこうやってこう引いてるんだけど、先生どうですか』とか、聞き方はちょっと工夫してもらいたいところはあるね。福島県の皆さんは非常に人がいいっていうかね、よその県は大概ね、縄張り争いみたいに私の弟子、私の弟子ってやってるんですよ、これが嫌いで、**福島県は誰の弟子でもなんでもない、みんなの、県連の弟子なんだという考えなんですよ、だから誰に聞いてもらっても構わないんだ。見てますから、間違いなく見てますから、この人にはこう言ってあげたいなというのはもってるんですよ、各先生方みんな。それは天から降ってこないから。**教えたがる先生はまた別だよ、だけども物事をわきまえてる先生で、おそらく目を見ただけでアドバイスをくれるっていうのは、よほど見るに見かねて言ったってことですよ。これは今言わないと取り返しがつかないなと思ったら、言うでしょうね。だからそこまでなる前に、私はどうでしょうか、ってね」（終）

加藤先生、そして加藤先生の奥様、長時間にわたるインタビューにご協力頂きまして誠にありがとうございました。お二人が出会った時のことを思い出しながらお話されている様子は仲睦まじいお姿で、私たちもとても温かい気持ちになりました。お昼ご飯には川俣町名物の川俣シャモの親子丼まで御馳走に！本当に楽しいインタビューをありがとうございました！

『 加藤先生にインタビューをして 』

今回、加藤先生のお話をうかがって印象に残ったのは「自分を知る」ということです。加藤先生は様々な場面で自分がどのような特性をもった弓引きなのかを気づき理解して、それをハレの場面で活かしていらっしゃいました。そして、結果の良し悪しでただ嬉しい悔しいと思うだけでなく、弓を引くとき自分自身を冷静に内観することで射の理解を深めているのではないかと思いました。

一方で「練習が嫌だった」という話もありましたが弓友を想い気持ちを奮い立たせる心情には共感しました。一緒に弓を引けなくともお互いを高め合える弓友は大きな財産であろうと思います。

まだまだ、新型コロナウイルスの影響でままならない状況が続きますが、今だからこそ自分を知り、磨き上げる有意義な時間となるはずです。

【今日のお料理どすえ】 青年部通信京都支部勝ちメシ担当記者より

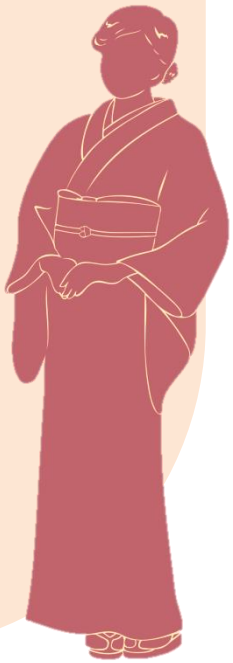
弓道の先生方には、お料理上手多い思いまへんか？特に男性の先生方は「そば」作りを得意とされてはる方が多いどすなぁ。そない中、加藤先生の得意料理はなんと「ローストビーフ」だそうどす！加藤先生にとっておきのレシピをお聞きしたさかい、みなさんに紹介いたします！

ローストビーフは、安いもも肉の塊を買ってくるんですよ。これ絶品だよ！薄く切るのね。いろいろソースを作る人もいるけど私はワサビと醤油で食べるんです。肉汁で野菜を炒めて添えたりもする。孫は肉をあまり食べないのに、これは喜んで食べるんだよ。

シフォンケーキも焼いたことあるけど、真ん中が凹んで、なかなか上手くできなくてムキになってさ。でもそのうちに、砂糖の量がただものではないなと思って、この頃はやってないんですよ。パンも焼いたことがあるね、パウンドケーキも。蕎麦打ちをしてた頃に、大会の朝に打ったんだよ。そしたら二の腕が痛くて弓が引けなかったことがある。蕎麦とローストビーフは自分が作っても美味しいと思うな。

ローストビーフの作り方

1. もも肉を買ってくる
2. 30 分～1 時間、常温に戻す
3. 紙で水分をふき取り、塩こしょうする
4. 表面だけ 20 秒ずつ焼く（6 面）
5. アルミホイルで包み、約 10 分休ませる
6. 鍋に 60 度のお湯を作り、ジップロックに入れ真空状態にする
7. 60 度を保ったまま、厚さ×10 分間、置いた後、取り出して冷蔵庫に保存！



◎日々是弓道 いとをかし◎

このコーナーでは弓道に関する素敵な情報を「趣がある興味深い」といった意の古語「いとをかし」の言葉にのせ折々にお届けしてまいります。

二本松弓道場にて、115 年前の弓が発見された！

なぜ 115 年前の弓だとわかるのか。答えは枕にあった。この弓は松本代志博先生が所有しており、たまたま握り革を変えようと革を剥がすと、丁寧に畳まれた新聞紙が枕の代わりに入っていたそう……。

破かないよう恐る恐る開くと、そこには「1905 年（明治 38 年）1 月 1 日 朝日新聞」と記載があり、この弓が少なくとも 115 年以上前から存在していることを教えてくれた。1905 年元旦といえば、**日露戦争真っ只中**。

古い弓のようだとは聞いていたが、まさかそこまで古く、ましてや戦争中に存在していた弓であったとは思わず驚いた。なぜ今ここにあるのだろう？当時の弓道とはいったいどのようなものだろう？元旦の新聞を使うなんて、昔の人はこのようなところで験を担いでいたのかな？など、私たちは悠久の歴史を感じ、想像を膨らませた。

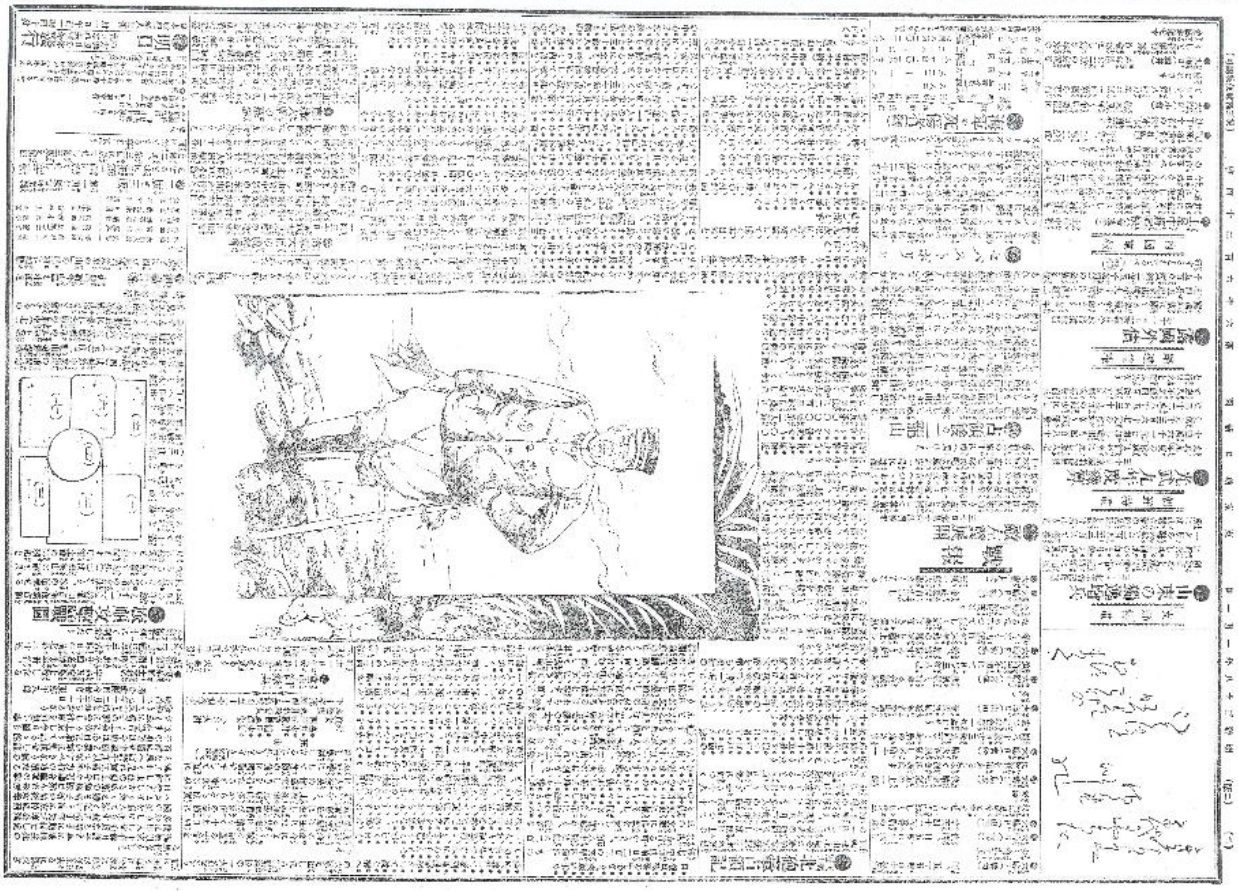
『切れ端となった新聞の一部を手掛かりにして、この新聞の全容を明らかにしたい』松本代志博先生の探究心に刺激を受けた私たちは、**当時の新聞から、その時代の弓事情を探ることにした。**

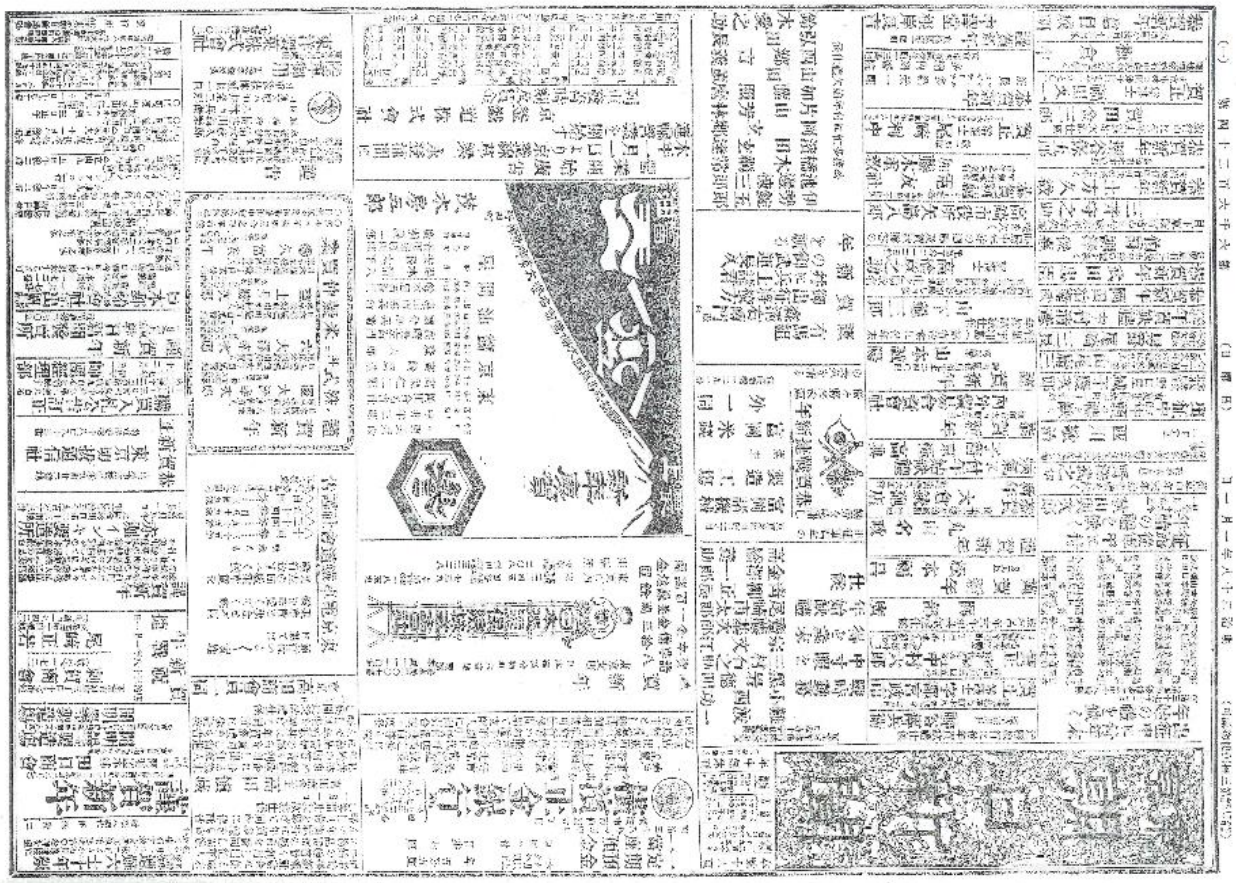
【1905 年（明治 38 年）1 月 1 日 朝日新聞】

【見つかった大昔の弓（銘柄不明）】

【切れ端となった新聞の復刻版】

新聞２ページ目の上段が枕に使われていた切れ端の部分です。





【転載元資料名および原本：福島県立図書館所蔵『朝日新聞『復刻版』明治編 142 1～2 頁】

日露戦争最中の激動の時代、明治

新聞を見ると、まさに戦争の最中であることが感じ取れる。令和の新聞記事とは 180 度異なる内容にドキドキしながらも、当時の時代背景に思いを馳せてみたくなる。この弓を引いていた方は、明治という激動の時代をどのような気持ちで過ごし、どのような思いで的前に立っていたのだろうか……。

私たちは、あらゆる弓道史から明治時代の弓道を取り巻く環境について調べることにした。

弓の衰退期

当時の弓を取り巻く環境を調べていると、明治時代は弓の衰退期～復興初期であったことが分かった。明治時代初期から中期にかけ、弓は老若男女問わず扱えるという特性から、遊具として今の東京などを中心に広まっていた。「町矢場」という名の施設は、遊技場である傍ら、裏では風俗店として商売をする店も存在した。そのため、政府の取り締まり対象となり、次々と閉店に追いやられた。もちろん健全な矢場である「大弓場」もあったが、当時は矢場といえば「町矢場」という認識が一般的であり、明治 24～25 年頃を機に、町矢場は衰退していく。

一方で、このような時代においても弓術(まだ弓道ではない)の存続に尽力した弓術家は存在し、明治 25 年頃より、徐々に学校を中心に弓術を始める者が増えていった。教師も生徒も、まずは「中たれば良し」というスタンスで弓の神髄を求めるというものは少なかったが、一度閉じた弓具店が再開するなど復興の足掛かりともなった。また大学では、学生を中心とした課外活動の一つとして弓術が活発に行われるようになり、大学対抗戦の実施など、組織化した活動が始まっていった。そしてついに明治 28 年に、武術を統括する組織「大日本武徳会」が設立され、「術」から「道」へと歩みだしていくのである。このように、当時は弓の衰退期～黎明期であり、弓道家には辛い時代であったのかもしれない。二本松市の城山弓道場にあった弓は私たちにそれを伝え、現代において、何苦労することなく弓を楽しめる環境があることに、あらためて感謝する機会を与えてくれたのである……。

資料掲載:朝日新聞〈復刻版〉明治編 142 福島県立図書館所蔵、月間弓道 1981 年(昭和 56)10 月号公益財団法人全日本弓道連盟
参考文献:弓射の文化史(近世～現代編)射芸の探求と教育の射 著:入江康平【雄山閣】、弓道その歴史と技法 著:松尾牧則【日本武道館】

(お願い)この新聞記事に掲載されている転載資料(写真・新聞記事)は資料掲載許可を経て掲載をしているものです。そのため、許可なく新聞記事の転載資料を複写や撮影などにより他資料やインターネットなどで使用することがないようお願いいたします。
(その他)明治時代の新聞記事は転載による影響で文字が読みにくくなっています。複写したものは事務局で保管しておりますので、記事の内容を確認したい方は、事務局までメールでお問合せ下さいますようよろしくお願いいたします。

編集後記

この度も「蒼穹の友」を手に取ってくださりありがとうございます。また、インタビューに快くご協力くださいました加藤先生、そして資料の使用に関しご協力頂きました全日本弓道連盟様をはじめ諸関係機関の皆様にも心より御礼申し上げます。今回の機関紙の裏のテーマは「歴史」です。大先輩方が築き上げてきたモノや功績、そして明治時代の弓道史から今の私たちは何を学ばなければいけないのか……。この機関紙がみなさんの好奇心を掻き立てる起爆剤になることを期待しています。(佐藤)

コロナ禍でなかなか動きが取れない日々が続きますが、じっくり自分の射を見直す、知識を深めるチャンスと捉えることもできます。次に会うときに「こいつ変わったな」と思ってもらえるよう、できることから積み重ねていきましょう。

あらゆる行事が見送られた今だからこその内容になったと思います。弓道という武道について、またそれに対する自分の姿勢について考える機会になりました。皆さんにとってもなにかきっかけになれば嬉しいです。(須藤)

コロナ禍であるからこそ、このような貴重なインタビューを行うことができました。『練習は嫌だったけど、ライバルは今頃練習しているんだろうなと思うと励みになった』まさに『蒼穹の友』だなと感じました。まだまだ世の中落ち着きませんが、弓をコツコツ頑張ってともに乗り越えていきましょう。(千葉)

加藤先生のインタビューから明治時代の弓道についてまで今回は幅広い内容になりました。記者たちの取材の経験値がどんどん上がっています。(笑)より良い紙面になるようこれからも頑張ります。(大和田)

大会や審査といった行事が再開されつつありますが、新型コロナウイルス感染症対策としての工夫があちらこちらに。運営の方々の細やかな配慮に感服するばかりです。青年部の活動再開も楽しみにしております。(先崎)